
主人公代わりますっ!!

赤メガネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公代わりますっ！！

【Nコード】

N6736I

【作者名】

赤メガネ

【あらすじ】

気まぐれな神様のせいで、サイトの代わりにルイズの使い魔になることになってしまった佐々木 優^{ユウ}。神様にもらった力はチート。主人公はその力を使って世界を動かしていく。いろんな作品の技を使います。

第1話 始まり（前書き）

初心者なのでよければアドバイスとかお願いします。

第1話 始まり

何もない真っ白な世界。

ここはどこ？

俺は何をしている？

ああそうだった：

オレは死んだんだ：

学校帰り。いつもの交差点。

オレは赤信号だったので、信号が変わるのを待っていた。

不意にオレの隣から男の子が飛び出した。

信号は赤。

前からはトラックが来ていた。

オレはとっさに飛び出してその子を突き飛ばした。

刹那、衝撃が走る：

痛みはなかった。ただ薄れていく意識の中、男の子の声が聞こえ、そのまま意識は飛んだ。

死んだってことは、ここは天国か？

何もない場所だな。

暇だったので散歩してみたが、ただただ白い空間が延々と続いているだけ。

10分ほど歩いたら、目の前に門が現れた。
なんだろこれ？

よく見るとインターフォンがついていた。

天国にインターフォンで：

まあいいや。とりあえず押してみる。

ピンポーン

出ない

ピンポーン

「はーい。どちらさまですか？」

あつ。やっと出た。

「ああ、オレは佐々木優って言います。」

「ああ、佐々木様ですね。お待ちしておりました。へっ?? お待ちしておりましたって何？」

まあいいや。早速中に入れてもらおうとしようか。

中に入ると、なんか背中に羽を生やした少女が立っていた。

「待っていたよ優君」

「あなたはだれですか？」

「私はなんと言うか。んー…君たちの世界で言う造物主とか創世神に当たる存在かな。名前はないから適当に呼んでね。で、君がここにいるのは私が呼んだからだよ。」

「何で俺を呼んだ？」

「それはねえー、話せばものすごく長くなってしまふんだよ。うん。」

「じゃあ、端的にきくけど、用件は何？」

「君には異世界に行ってもらいたい。ゼロの使い魔って読んだことある？」

「はい。オレ、オタクでしたし。」

オレは元の世界ではオタクだった。

「じゃあ話は早いね。君にはサイトの代わりにルイズの使い魔になつて欲しいんだよ。うん。」

「ちよっと待ってください。あれは小説で実際に存在するわけない

でしょ。」

「いやいや。私を作ったから。」

ああ…そういえばこの人、神でしたね。

待てよ…

「何でオレがサイトの代わりになる必要があるんだ？あんたが造ればいいだろ。」

「ええー。そんなの決まってるじゃん、原作のままなんて面白くないし。それに君は一度死んでいる。二度目の人生歩めるんだしよくね？」

まあそれもそうだ。

「ああ、はいわかりました。」

「よし。じゃあ君におまけとして力をあげよう。なんか好きなアニメいつてみ。」

最近ハマっているといえば、

「REBORN」

「じゃあ、向こうの世界できみは、向こうの魔法とREBORNの武器とか全部使えるようにしとくね。」

「何そのチート…」

「まあいいじゃん面白そうだし。」

ああ、そろそろゲートが開くよ。じゃあね。」

「まあ行ってきます。」

そしてオレは、ゲートをくぐった。

第2話 召喚（前書き）

アドバースとか誤字脱字があれば教えてください。

第2話 召喚

「あんた誰？」

あきれたようにオレの顔を覗き込んでいる少女がいる。

桃色がかったブロンドの髪と透きとをるような白い肌、そして、胸の辺りに広がる平原。これはルイズか。

「誰って、佐々木優。」

うん。原作どおり。

「どこの平民？」

「ルイズ『サモンサーヴァント』で平民呼び出してどうするの？」

「ちょ、ちょっと間違っただけよ！」

いやいや、間違っていないよルイズさん。

「間違いつていつもそうじゃん。」

「さすがはゼロのルイズだ。」

誰かがそう言うと、人垣がどっと爆笑する。

「ミスタ・コルベール！」

人垣が割れて、中年の頭がかわいそうなことになっているおっさんが現れた。あの禿げ頭はまさしくコルベール！あれで、真ん中に一本けがあったら、まんま磯野さんちのお父さんだ。

「何だね？ミスヴァリエール。」

「あの！もう一度召喚させてください。」

ルイズは色々と講義しているが、まあ、こっからの結末は知っていたので聞き流しておいた。

結局言い負かされて戻ってきた。まあ、分かってたけどね。

「ねえ。」

「ん？」

「あんた感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだからね。」

はあー。いよいよか。さらば、オレのファーストキス。

ルイズは目を瞑り詠唱を始めた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、われの使い魔となせ。」

ずっとオレの額に杖を置いた。そしてゆっくりと唇を近づけてくる。さっ（よけてみた。）

「ちょっと、じっとしてなさいよ。」

また唇を近づけてくる。

ささっ（またよけてみた。）

「じっとしてなさいって言ってるでしょ。」

本日三度目、また顔を近づけてくる。

サ…ガシッ（よけようとした瞬間つかまれた。）

ガッ（脚払いの音。）

ドスッ（ルイズが倒れたオレのマウントを奪う音。）

ゴス、ドゴ、ドカツ、バキッ、グハア（ルイズがオレにひたすら拳を振り落とす音。）

「じっとしていてくれるわよね？」

ルッルイズさん、黒いです…

やばい、ガチデで怖い。

「はっ、はい…」

ルイズの唇がオレの唇に重ねられた。今度こそ本当にさらばだオレのファーストキス。

「終わりました。」

前を見るとルイズの顔が赤くなっている。

恥ずかしがるくらいならしないでください。

「サモンサーヴァントは何回も失敗したが、コントラクトサーヴァントはきちんとできたようだね。」

コルベールがうれしそうに言った。

「相手が平民だったから契約できたんだよ。」

「そいつが高位の幻獣だったら契約なんてできないよ。」

いやあー、ルイズは虚無の担い手だからしょうがないでしょ。

「バカにしないで！私だってたまにはうまくいくわよ。」

「本当にたまにね。まあ、ゼロのルイズには平民がお似合いね。顔がそこそこのいいのはあってないけど。」

へっ??（後で分かったことだが、オレの顔はREBORNのディーノみたいになっていた。たぶんあの神様の仕業だろう。個人的にディーノは好きだったので結構うれしい。）

えっとこいつは…

洪水のモンモランシーだっけか？いや、香水だったかな？まあ、どっちでもいいや。

あらら、なんかルイズたちがもめはじめたぞ。そういやそろそろルーンが刻まれるころかな。

「熱っ！！」

何これ熱い、つか痛い。インフルエンザの予防摂取の5倍ぐらい痛いぞ。

「静かにしなさい。ルーンが刻まれているだけよ。」

そんなこと分かってるて。つかお前もやってみろ。痛いから。ガチで。

「これは珍しいルーンだね。」

見んな禿げ。金取るぞ。

「さてと、皆教室に戻るぞ。」

みんなが一斉に宙に浮いた。

隣を見るとやはりルイズがいた。こいつ飛べないもんな。

「ルイズ、お前は歩いてこいよ！」

「あいつ『フライ』はおろか、『レビテーション』も使えないんだぜ。」

口々にそう言って飛び去っていく。

それでも、君たちの数十倍強くなるんだけどね。

ルイズは二人つきりになると、ため息をついた。それからオレの方を向いて、大声で怒鳴った。

「あんた、なんなのよ!」

「もう忘れたの? オレは佐々木優。頭大丈夫?」

「そんなことを言ってるんじゃない。あんたこそ頭大丈夫?」

「ああ、それとルイズはオレをはずれだと思っているようだが、オレは当たり前だから。」

「あたりとかはずれとかって何よ?」

「まあ、じきに分かるさ。それより、早く行こうぜルイズ」

「何ご主人様に命令してんのよ! しかも呼び捨て!」

「細かいこと気にするな。そんなだから胸が小さいんだぞ。」
ドゴツ

「いたッ何すんだよ!!」

「あーらごめんなさい手が滑っちゃった。それより早く行くわよ。」
「まったく。おい、待てよ。」

オレたちは校舎へ歩き出した。

ここからおれの使い魔としての生活が始まった。

第3話 二つのボックス（前書き）

アドバイスや誤字脱字があったら教えてください。

第3話 二つのボックス

「オレはこことは別の世界から来た」

「それほんと？」

「嘘ついてどうする？」

「信じられないわ！」

「信じられなくても、事実なんだからしょうがないじゃん。現実逃避しないで認めたら。」

「別の世界ってどういうこと」

「どういうことって言われてもな。」

「魔法使いがいなくて、月がひとつってとこかな。」

「確か原作もこんな感じだったはず。」

「そんな世界がどこにあるって言うの？」

「だから、オレのもといった世界がそうだったって先から言っているだろ。頭大丈夫か？そんなことも理解できないの？」

「平民の分際で馬鹿にしないでよ」

「オレは平民じゃない！」

「あんたメイジじゃないんでしょ。だったら平民じゃない」

「オレにはそんな関係ない」

「もう、あんたほんとにこの世界の人間なの？」

「お前本当に頭大丈夫か？さっきから違うって言ってるだろ。」

「じゃあ、なんか証拠見せて」

「証拠？んー。なんかあったっけかな？」

「そーいや、学校帰りにトラックにひかれたから服は学ランのまんまだな。」

「オレの今着ている服とか？こんな服この世界に無いだろ」

「んー。珍しい服だけどそれだけで信じろって言うのはね。」

「他になんかあるかな？」

「ポケットを探ってみる。」

カサッ。ん？何だろ？

手紙だった。こんなの入れた覚えは無いぞ。誰からだ？

「ちょっと待ってろ。」

「もう、早くしてよね。」

~~~~~

ハロー、優くん元気してる？神様だよ。

今何してる？たぶんルイズちゃんに自分がどこから来たか説明して  
るところだと思っただよ。それで困ってたりする？

そこで、僕からサプライズイベントです。

君に僕特製のオリジナルボックスをプレゼントしたいと思います。  
パチパチッ

君のベルトについてると思うから後で見えておいてね。

そのボックスの説明しとくね。黒と白があると思うけど、  
まず、黒のほうはなんか困ったときにあけてね。必要なものが入っ  
てるから。戦闘には使えないよ。白のほうはピンチになったときあ  
けてね。中身は内緒だよ。あけてからのお楽しみってやつだよ。う  
ん。

黒は大空、白はどの属性の炎でも開くから。

あ、あと能力の説明するの忘れてたね。

えっとねー。使いたいものとか能力を想像するだけでいいから。そ  
れだけ。

便利だね！！

うん。そういうことだからがんばってね。

僕は天界から見てるよ。じゃね。

~~~~~

.....

こいつ文書くの下手だな。

つか、ほんと何でもありだな。

まあ、ボックスはありがたく使わせてもらおう。

リングは：ボンゴレリング（大空）でいいか。

とか、考えているとすでに指にリングがついていた。

ベルトを確認すると二つボックスがぶら下がっていた。

よし、やるか。

……。

あれっ？炎が出ない。つかオレの覚悟ってなんだっけ？

んー。使い魔なんだから、ルイズを守るとかかな？

まあ、試してみよう。

ボツ、おおでたでた。つか、すんげー鮮やかなオレンジだな純度たかすぎだろこれ。それはおいといて早くあけるか。

たしか黒いほうだな。

カチッ。開匣！

ボックスから出てきたのは、ノートパソコンだった。

おっ、これでいけるな。

「待たせたなルイズ、これなんかどうだ？」

「なにこれ？」

「ノートパソコン」

「たしかに見たこと無いわね。何のマジックアイテム？」

「魔法じゃない。科学だ。」

「綺麗ね……。何系統の魔法で動いてるの？風？水？」

「科学だ」

「ふーん、でも、これだけじゃわからないわよ」

「どうして？こんな物、この世界には無いだろ？」

「ないけど……」

「なら信じるよ」

「わかったわよ！信じるわ！」

ふう。やっと終わった。長かった、長かった。

これだから頑固者は。

「で、オレは真に不本意ながらお前の使い魔になっちゃったんだけ

ど、基本的に何すればいいの？」

「まず、使い魔は、主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」
「今、見えてる？」

「あんたじゃ無理みたいね。わたし、何にも見えないもん！」

「そりゃ、残念。」

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。たとえば秘薬とかね」

「無理だな。」

「何で？」

「めんどくさいし、第一、オレはこくら辺の地理をまったく知らないから」

「まあいいわ。これが一番なんだけど……、使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を守るのが一番の役目！でも、あんたじゃ無理ね……」

「人間だもん……」

「お前は何を言ってるんだ？オレはこの世界で一番強いと思うぞ。」
いや、まあオレの能力チートだし。

「何寝言言ってるの？寝言は寝て言いなさい。あんたなんかカラスにも負けそうじゃない」

「信じてないならいいよ。後でわかることだし」

「だから、あんたにもできそうなことやらせてあげる。洗濯。掃除。その他雑用。」

「そのくらい自分でやれ。あまつたれんな。」

「あんた使い魔でしょ」

「この野郎……」

「さてと、しゃべったら、眠くなっちゃたわ」

「オレはどこで寝ればいいんだ？」

ルイズは床を指差した。

「犬や猫じゃないんだぞ」

「しかたないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

ルイズは服を脱ぎだした。下着があらわになる。

「何やってんの？変態？露出狂なの？」

「寝るから着替えてるのよ。」

「男の前なの？」

「男？誰が？使い魔に見られたってどうも思わないわ」

「ふーん。じゃあ」

じいーーーーー……。 (凝視)

じいーーーーー……。 (凝視)

「やっぱりあっち向いてて……」

顔を赤くしながら言っている。

「はいはい。」

オレは窓のほうを向いた。

「じゃあ、これ、明日になったら洗濯しといて」

レースのついたキャミソールに、パンティが飛んできた。

「うわ、汚い。こんなもん投げんなよ！つか、自分で洗え！」

「誰があんたを養うと思っているの？誰があんたのご飯を用意する
と思ってるの？ここ誰の部屋？」

「オレを勝手に呼んだの誰？」

「うっ……くっ口出ししない。あんたは私の使い魔でしょ？洗濯、掃
除、雑用、当然じゃないの」

「まあいいや」

こうなる事は分かってたしね。

ルイズが、ぱちんと指を弾くと、ランプの灯りが消えた。

数分もすると規則正しい寝息が聞こえてきた。

「よしっ。そろそろいいかな」
カチッ。

「何でも入ってるなこれ」

また、黒いボックスを開けると今度は、ベッドが出てきた
そして、オレは眠りについた。

窓の外には月が二個、怪しく光っていた。

第3話 二つのボックス（後書き）

文才無くてすみません。

今週から学校の定期考査があるので更新が遅れますがご了承ください。

第四話 使い魔たち（前書き）

定期考査終わったー！ー！。

と、思ったら今度は業者のテストがいっぱいきました。悲しきかな
受験生：

なので、更新速度遅くなります。

ごめんなさい。

第四話 使い魔たち

「知らない天井だ」

これは言わなくちゃね！

ルイズは……。

まだ起きそうにないな。つか、まだ日が出たばっかか。
洗濯でもしとくかな。

……。

迷った。つか、どこで洗えばいいかしらねー……。

「あの、どうかされました？」

立ち尽くしてたら、黒髪のメイドさんが話しかけてきた。

黒髪のメイド……。シエスタか。

「えっと、洗濯物洗いたいんだけど、どこで洗えばいいのか分かんなくて、迷っちゃって。」

「そうだったんですか。でも、あなたは使用人じゃ……。」

「ああ、オレルイズの使い魔」

「あなたがミス・ヴァリエールの使い魔さんだったんですね。私はシエスタです」

「オレは佐々木優。マサルって呼んでシエスタ。

それで、この洗濯物はどこで洗えばいいの？」

「よろしければ私が洗濯しますよ。」

「マジ？」

「はい。」

「じゃあ、お願い。」

「それでは明日から、あちらの水場においてください。洗い終えたら、ミス・ヴァリエールの部屋までもっていきますので」

「ありがとね。助かったよ。オレはルイズ起こさなくちゃだから失礼するよ」

「いえ、気にしないでください。それではまた。」

「またね。シエスタ。」

さして、そろそろルイズを起こさなくちゃな……。

「朝だよ。お嬢様。」

「う、うーん。……あんた誰？」

「もう忘れたの？ 痴呆症？」

「だっ 誰が痴呆症よっ！ って昨日召喚したんだったわね」

朝っぱらから元気いいな。

「服」

制服を投げてやった。ルイズはだるそうにネグリジェを脱ぎだす。

ジーーーーー（再び凝視）

「向こう向いてて!」

顔を赤くして叫んでる。

はいはい。

「下着」

下着見られるのはいいのね…。

オレはクローゼットの一番下の引き出しを開けて、ルイズに下着を渡す。

「何であんた私の下着の場所知ってるの?」

やば。しくった。オレは原作読んでたから知ってたけど…。

「下着は、一番下の引き出して相場が決まってるんだよ!」

さあ、どうくる。

「ふーん、そうなんだ。」

よしっ。

ルイズの着替えが終わって外に出た。

すると、隣の部屋から赤い髪の女の子が出てきた。

この髪。そして、あの色気。キュルケだな。

「おはよう、ルイズ。あなたの使い魔って、それ?」

「そうよ」

「あっはっは!ほんとに人間なのね!すごいじゃない!」

結構むかつくな。

「どうせ使い魔にするなら、こういうのがいいわよねえ!。フレイム!」

キュルケの部屋から使い魔が出てくる。

「サラマンダーだね」

「よく知ってるわね。そうよ!。火トカゲよ!。見てこの尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ。ブランドものよ!。好事家なんかにみせたら値段なんかつかないわよ」

「そりゃよかったわね」

そんなことより、フレイムだよ。原作では、全然絵が出なかったけ

ど、現物見ると結構可愛いな。

なでていいかな？いいよね。

うん。なでてみよう。

「きゆるきゆる」

つとのどを鳴らした。

やばい、マジで可愛い！！

「あら？あたしのフレームが懐くなんて。あなたお名前は？」

「佐々木優。マサルって呼んでね」

「変わった名前ね」

「うん。よく言われる」

こっち限定でね。

「じゃあ、お先に失礼」

そう言ってキュルケたちはさっさといった。

「くやしー！何なのあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！ああもう！」

「はいはい、興奮しない。だから禿げるんだよ」

「禿げてないわよ。それより、食堂に行くわよ。」

食堂に着き、ルイズのいすを引く。

「貴族は朝からこんなに食ってんの？見てるだけで胸焼けしそう。」

「あんたのはそれよ」

「分かってる。だけど、床で食えってのはないんじゃない？」

「あのね。ほんとには使い魔は外。あんたは私の特別な計らいで、床」

「特別な計らいなんていらないよ。だから、外で食ってくる。」

ちようど会いたいやつもいるしな」

そう言っただけに出た。ルイズが怒鳴っていたが、気にしない。

気にしたら負けだと思ってます。

適当にボックス使ってシートをだして手っ取り早く朝食を済ませた。

さーて、あいつ探すかな。

あいつって？そりゃ、シルフィードに決まってるだろ。

おっ、いたいた。

「おはよう。オレは、マサル。よろしくな。」

「きゅいきゅい」

サラマンダーも可愛かったがシルフィードはそれを上回るな。
なでる。

「あつ、オレと二人だけのときは人語で話していいよ」

「きゅい？」

「まあ、いいか。」

「誰？」

シルフィードをなでていると、声をかけられた。

振り返ると、青い髪の女の子が立っていた。タバサだな。

「おれは、佐々木優。マサルって呼んで」

「タバサ」

「タバサか。よろしくね。」

「この子、きみの使い魔だよね」

「そう。名前はシルフィード。」

それより早く戻ったほうがいい。ルイズが探してる」

「わかった。ありがとう。またね、タバサ、シルフィード」

二人？一人と一匹に別れを告げその場を去った。

「シルフィード。彼は何者？」

「とっても優しい人なのね。けど、とても不思議な人だったのね。
私がしゃべれるのも知ってたのね」

「そう。」

タバサは優の去っていったほうをみていた。

第四話 使い魔たち（後書き）

アドバースや誤字脱字があれば教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6736i/>

主人公代わりますっ!!

2010年10月11日01時51分発行